

藤裏葉

渋谷栄一訳

第一章 夕霧の物語 雲居雁との筒井筒の恋する

「第一段 夕霧と雲居雁の相思相愛の恋」

御入内の準備の最中にも、宰相中将は物思いに沈みがちで、ぼんやりした感じがするが、

「一方では、不思議な感じで、自分ながら執念深いことだ。むやみにこんな恋しいことならば、関守が、目をつぶって許そうというほどに気弱になりだという噂を聞きながら、同じことなら、体裁の悪くないよう最後まで通そう」と我慢するにつけても、苦しく思い悩んでいらっしやる。

女君も、大臣がちらつとおっしやっした縁談のお話を、「もしも、そうなら、わたしのことをすっかり忘れてしまつたら」と嘆かわしくて、不思議と背を向けあつた関係ながら、そうはいつでも相思相愛の仲である。

内大臣も、あれほど強情をお張りになつたが、意地の張りがいのないのにご思案にあまつて、

「あの宮におかれても、そのようにお決めになつてしまつたら、再びあれこれと改めて別の相手を探す間、その相手にも悪いし、ご自分の方にも物笑いとなつて、自然と軽率だという噂の種にされよう。隠そうとしても、内輪の失敗も、世間に漏れているだろう。何とか世間体をつくらつて、やはり折れた方がよいようだ」

と、お考えになつた。

表面上は何気ないが、恨みの解けないご関係なので、きつかけもなく言ひ出すのはどんなものか」と、「躊躇なさつて、改まつて申し出るのも、世

問の人が思うところも馬鹿馬鹿しい。どのような機会にそれとなく切り出したらよからう」などと、お考えだつたところ、三月二十日が、大殿の大宮の御忌日なので、極楽寺に参詣なさつた。

「第二段 三月二十日、極楽寺に詣でる」

「ご息たちを皆引き連れて、ご威勢この上なく、上達部なども大勢参集なさつていたが、宰相中将、少しも引けを取らず、堂々とした様子で、容貌など、ちょうど今が盛りに美しく成人されて、何もかもすべて結構な様子である。

この大臣を、ひどいとお思い申し上げなさつてから、お目にかかるのも、つい気が張つて、とてもひどく気をつかつて、取り澄ましていらつしやるのを、大臣も、いつもよりは注目なさつている。御誦経など、六条院からもおさせになつた。宰相の君は、誰にもまして、万端のことを引き受けて、真心をこめて奉仕していらつしやる。

夕方になつて、皆がお帰りになるころ、花はみな散り乱れ、霞の朧ろな中に、内大臣、昔をお思い出して、優雅に口ずさんで物思いに耽つていらつしやる。宰相も、しみじみとした夕方の景色に、ますます物思いに沈んだ面持ちで、「雨が降りそうです」と、人々が騒いでいるのに、依然として物思いに耽りきつていらつしやつた。心をときめかせて御覧になることがあるのであろうか、袖を引き寄せて、

「どうして、そんなにひどく怒つておいでなのか。今日の御法要の縁故をお考えになれば、不行届きはお許し下さいよ。余命少なくなつてゆく老いの身に、お見限りなさるのも、お恨み申し上げたい」

とおっしやるので、ちよつと恐縮して、
「故人のご意向も、お頼り申し上げるようにと、承つておりましたが、お許しのないご様子に、遠慮致しておりました」

とお答え申し上げになる。

「気ぜわしい雨風に、皆ばらばらに急いでお帰りになつた。宰相の君は、どのようにお考えになつて、いつもとは違つて、あのようなおっしやつたのだらうか」などと、絶えず気にかけていらつしやる内大臣家のことな

ので、ちょっとしたことであるが、耳が止まって、ああこうかと、考えながら夜をお明かしになる。

「第三段 内大臣、夕霧を自邸に招待」

長い年月思い続けてきた甲斐あつてか、あの内大臣も、すっかり気弱になつて、ちょっとした機会で、特別にというのでなく、そうはいつでも相応しい時期をお考えになつて、四月の初旬ころ、お庭先の藤の花、たいそつみごとに咲き乱れて、世間にある藤の花の色とは違つて、何もしないのも惜しく思われる花盛りなので、管弦の遊びなどをなさつて、日が暮れてゆくころの、ますます色美しくなつてゆく時分に、頭中将を使いとして、お手紙がある。

「先日の花の下でお目にかつたことが、堪らなく思われたので、お暇があつたら、お立ち寄りなさいませんか」

とある。お手紙には、

「わたしの家の藤の花の色が濃い夕方に訪ねていらつしやいませんか、逝く春の名残を惜しみに」

おつしやる通り、たいそつ美しい枝に付けていらつしやつた。心待ちしていらつしやつたのにつけても、心がどきどきして、恐縮してお返事を差し上げなされる。

「かえつて藤の花を折るのにまごつくのではないでしょうか。夕方時のはつきりしないころでは」

と申し上げて、

「残念なほど、気後れしてしまつた。適当に取り纏つて下さい」

と申し上げなされる。

「お供しましよつ」

とおつしやつたが、

「面倒なお供はいりません」

と言つて、お帰しになつた。

大臣の御前に、これこれしかじかです、と言つて、御覽にお入れになる。

「考えがあつておつしやつているのであるつか。そのように先方から折れて

来られたのならば、故人への不孝の恨みも解けることだろう」

とおつしやる。そのご高慢は、この上なく憎らしいほどである。

「そつではございますまい。対の屋の前の藤が、例年よりも美しく咲いているといふので、暇なころなので、管弦の遊びをしようなどといふのでございましよつ」

と申し上げなされる。

「わざわざ使者をさし向けられたのだから、早くお出掛けなさい」

とお許しになる。どんなだろうと、内心は不安で、落ち着かない。

「直衣はあまりに色が濃過ぎて、身分が軽く見えよつ。非参議のうちとか、何も無い若い人は、一藍はよいだろうが、お召し替えになるかね」

とおつしやつて、ご自分のお召し物の格別見事なのに、何ともいえないほど素晴らしい御下着類を揃えて、お供に持たせて差し上げなされる。

「第四段 夕霧、内大臣邸を訪問」

ご自分のお部屋で、念入りにおめかしなさつて、黄昏時も過ぎ、じれつたく思つところに参上なさつた。主人のご息たち、中将をはじめとして、七八人うち揃つてお出迎えなされる。どの方となくいづれも美しい器量の方々が、やはり、その人々以上に、水際立つて美しい一方、優しく、優雅で、犯しがたい気品がある。

内大臣、お座席を整え直させたりなされるご配慮、並大抵でない。御冠などお付けになつて、お出になるうとして、北の方や、若い女房などに、

「覗いて御覧なさい。たいそつ立派になつて行かれる方だ。態度などもとても沈着で、堂々としたものだ。はつきりと、抜きん出て成人された点では、父の大臣よりも勝つていようだ。」

あの方は、ただ非常に優美で愛嬌があつて、見るとついほほ笑みたくなり、世の中の憂さを忘れるような気持ちにおさせになる。政治の面では、多少柔らかかさ過ぎて、謹厳さに欠けるところがあつたのは、もつともなことだ。

この方は、学問の才能も優れ、心構えも男らしく、しっかりしていて申し分ないと、世間の評判のようだ」

などとおつしやつて、対面なされる。儀礼的で、固苦しいご挨拶は、少しだ

けにして、花の美しさに興味はお移りになった。

「春の花、どれもこれも皆咲き出す色ごとに、目を驚かさな物はないが、氣ぜわしく人の氣も構わず散ってしまうのが、恨めしく思われるころに、この藤の花だけがひとり遅れて、夏に咲きかかるのが、妙に奥ゆかしくしみじみと思われます。色も色で、懐しい由縁の物といえましよう」

と言つて、ちよつとほほ笑んでいらつしやる、風格があつて、つややかでお美しい。

「第五段 藤花の宴 結婚を許される」

月は昇つたが、花の色がはつきりと見えない時分なのだが、花を愛でる心に寄せて、御酒を召して、管弦のお遊びなどをなさる。大臣、程もなく空酔いをなさつて、遠慮もせずに無理に酔わせなさるが、用心して、とても断るのに困つてゐるようである。

「あなたは、この末世にできすぎるほどの、天下の有識者でいらつしやるよつだが、年を取つた者を、お忘れになつていらつしやるのが辛いことだ。古典にも、家礼ということがありませんか。誰そのの教えにも、よくご存知でいらつしやるかと存じますが、ひどく辛い思いをおさせになると、お恨み申し上げたいのです」

などとおつしやつて、酔い泣きといつのか、ほどよく抑えて意中を仄めかしなさる。

「どうしてそのような。今は亡き方々を思い出しますお身変わりとして、わが身を捨ててまでもと、存じておりますのに、どのように御覧になつてのことをごさいますしうか。もともと、わたしのつかつな心の至らなさをためです」

と、恐縮して申し上げなさる。頃合を見計らつて、はやし立てて、

「藤の裏葉の」

とお謡いになつた、そのお心をお受けになつて、頭中将、藤の花の色濃く、特に花房の長いのを折つて、客人のお杯に添えになる。受け取つて、もてあましてゐると、内大臣、

「紫色のせいにしてしましう、藤の花の待ち過ぎてしまつて恨めしいことだが」

宰相中将、杯を持ちながら、ほんの形ばかり拝舞なさる様子、実に優雅である。

「幾度も湿つばい春を過して来ましたが、今日初めて花の開くお許しを得ることができました」

頭中将にお廻しになると、

「うら若い女性の袖に見違える藤の花は、見る人の立派なためかいつそう美しさを増すことでしょう」

次々と杯が回り歌を詠み添えて行つたようであるが、酔いの乱れに大したこともなく、これより優れていない。

「第六段 夕霧、雲居雁の部屋を訪う」

七日の夕月夜、月の光は微かであるのに、池の水が鏡のように静かに澄み渡つてゐる。なるほど、まだ茂らない梢が、物足りないころなので、たいそう氣取つて横たわつてゐる松の、木高くないのに、咲き掛かつてゐる藤の花の様子、世になく美しい。

例によつて、弁少将が、声をたいそう優しく、葦垣を謡う。大臣、

「実に妙な歌を謡つものだな」

と、冗談をおつしやつて、

「年を経たこの家の」

と、お添えになるお声、誠に素晴らしい。興味ある中に冗談も混じつた

管弦のお遊びで、気持ちのこだわりもすっかり解けてしまつたようである。

だんだんと夜が更けて行くにつれて、ひどく苦しい様子を見せて、

酔いが回つてひどく辛いので、帰り道も危なそうです。泊まる部屋を貸して

いただけませんか」

と、頭中将に訴えなさる。大臣が、

「朝臣よ、お休み所になる部屋を用意しなさい。老人はひどく酔いが回つて

失礼だから、引込むよ」

と言ひ捨て、お入りになつてしまつた。頭中将が、

「花の下の旅寝ですね。どういふものだろう、辛い案内役ですね」

と言つて、

「松と約束したのは、浮気な花なものです。縁起でもありません」

と反発なさる。中将は、心中に「憎らしいな」と思うところがあがるが、人柄が理想通り立派なので、「最後はこのようになって欲しい」と、願って来たことなので、心許して案内した。

男君は、夢かと思われなさるにつけても、自分の身がますます立派に思われなさったことであろう。女は、とても恥ずかしいと思ひ込んでいらつしやるが、大人になったご様子は、ますます不足なところもなく素晴らし

い。「世間の話の種となつてしまふような身の上を、その誠実さをもつて、このようにお許しになつたのでしよう。わたしの気持ちをお分りになつて下さらないとは、変なことですね」

と、お恨み申し上げなさる。

「少将が進んで謡い出した『葦垣』の心は、お分りでしたか。ひどい人ですね。『河口』と、言い返したかつたなあ」

とおつしやると、女は、とても聞き苦しい、とお思ひになつて、軽々しい浮名を流したあなたの口は、どうしてお漏らしになつたのですか。あきれました」

とおつしやる様子は、実におつとりしている。少し微笑んで、「浮名が漏れたのはあなたの父大臣のせいでもありますのに、わたしのせいばかりになさらないで下さい長い歳月の思いも、本当に切なくて苦しいので、何も分りません」

と、酔いのせいにして、苦しうに振る舞つて、夜の明けて行くのも知らないふうである。

女房たちが、起こしかねているのを、大臣が、「得意顔した朝寝だな」と、文句をおつしやる。けれども、すっかり夜が明け果てないうちにお帰りになる。その寝乱れ髪のお顔は、見がいのあつたことだ。

「第七段 後朝の文を贈る」

お手紙は、やはり人目を忍んだ配慮で届けられたのを、かえつて今日はお返事をお書き申し上げになれないのを、口の悪い女房たちが目引き袖引

きしているところに、内大臣がお越しになつて御覧になるのは、本当に困つたことよ。

「打ち解けて下さらなかつたご様子に、ますます思い知られるわが身の程よ。耐えがたいつらさに、またも死んでしまふそだが、お咎め下さいますな。人目を忍んで絞る手も力なく今日は人目にもつきそつな袖の涙のしずくを」などと、たいそう馴れ馴れしい詠みぶりである。微笑んで、

「筆跡もたいそう上手になられたものだなあ」

などとおつしやるのも、昔の恨みはない。

お返事が、直ぐに出来かねているので、

「みつともないぞ」

とおつしやつて、「躊躇なつていられるのももつともなことなので、あちらへお行きになつた。

お使いの者への褒祿は、並大抵でなくお与えになつた。頭中将が、風情のある様にお持てなしなさる。いつも人目を忍んでは持ち運んでいたお使い、今日は顔の表情など、人かどに振る舞つていられるようである。右近将監である人で、親しくお使いになつていられる者であつた。

六条の大臣も、これこれとお聞き知りになつたのであつた。宰相中将、いつもより美しさが増して、参上なさつたので、じつと御覧になつて、

「今朝はどうした。手紙など差上げたか。賢明な人でも、女のことでは失敗する話もあるが、見苦しいほど思ひつめたり、じれたりせずにごされたのは、少し人より優れたお人柄だと思つたことだ。

内大臣のご方針が、あまりにもかたくなで、すっかり折れてしまわれたのが、世間の人も噂するだろうよ。だからといって、自分の方が偉い顔をして、いい気になつて、浮気心などをお出しなさるな。

あのようにおおらかで、寛大な性格と見えるが、内心は男らしくなくな

じていて、付き合いくいとところがあつたのである」

などと、例によつてご教訓申し上げなさる。釣り合いもよく、恰好のご夫婦だ、とお思ひになる。

ご子息とも見えず、少しばかり年長程度にお見えである。別々に見ると、同じ顔を写し取つたように似て見えるが、御前では、それぞれに、ああ素晴らしいとお見えていらつしやつた。

大臣は、薄縹色の御直衣に、白い御桂の唐風の織りが、紋様のくつきりと浮き出て艶やかに透けて見えるのをお召しになって、今もこの上なく上品で優美でいらっしゃる。

宰相殿は、少し色の濃い縹色の御直衣に、丁子染めで焦げ茶色になるまで染めた桂と、白い綾の柔らかいのを着ていらっしゃるのは、格別に優雅にお見えになる。

「第八段 夕霧と雲居雁の固い夫婦仲」

灌仏会の誕生仏をお連れ申して来て、御導師が遅く参上したので、日が暮れてから、六条院の御方々から女童たちを使者に立てて、お布施など、宮中の儀式と違わず、思い思いになさった。御前での作法を真似て、公達なども参集して、かえって、格式ばった御前での儀式よりも、妙に気がつかわれて気後れするのである。

宰相は、心落ち着かず、ますますおめかしし、衣服を整えてお出かけになるのを、特別にはないが、多少お情けをおかけの若い女房などは、恨めしいと思っている人もいたのであった。長年の思いが加わって、理想的なご夫婦仲のようなので、水も漏れまい。

主人の内大臣、ますます側に近づくほど美しいのを、かわいらしくお思いになって、たいそう大切にお世話申し上げなさる。負けたことの悔しさは、やはりお持ちだが、こだわりもなく、誠実なご性格などで、長年の間浮気沙汰などもなくてお過ごしになったのを、めったにないことだとお認めになる。

弘徽殿女御のご様子などよりも、派手で立派で理想的だったので、北の方や、仕えている女房などは、おもしろからず思ったり言ったりする者もいるが、何の構うことがあるのか。按察使大納言の北の方なども、このように結婚が決まって、嬉しくお思い申し上げていらっしゃるのであった。

第二章 光る源氏の物語 明石の姫君の内

「第一段 紫の上、賀茂の御阿礼に参詣」

こうして、六条院の御入内の儀は、四月二十日のころであった。対の上、賀茂の御阿礼に参詣なさろうとして、例によつて御方々をお誘い申し上げなさったが、なまじ、そのように後に付いて行くのもおもしろくないのをお思いになって、どなたもどなたもお残りになって、仰々しいほどでなく、お車二十台ほどで、御前駆なども、ごたごたするほどの人数でなく、簡略になさったのが、かえって素晴らしい。

祭の日の早朝に参詣なさつて、帰りには、御見物なさる予定のお棧敷席におつきになる。御方々の女房たち、それぞれの車を後から連ねて、御前に車を止めているのは、堂々として、あれは誰それだ」と、遠くから見ても仰々しいご威勢である。

大臣は、中宮の御母御息所が、お車の榻を押し折られなさつた時のことをお思い出しになって、

「権勢をたのんで心奢りなさつて、あのようなことを起こすのは、心ないことであつた。全然無視していた方も、その恨みを受けた形で亡くなつてしまつた」

と、そのあたりは言葉をお濁しになって、

「後に残つた人で、中將は、このような臣下として、やっと立身した程度だ。宮は並ぶ者のいない地位にいらっしゃるのも、考えてみれば、実にしみじみと感慨深い。何もかもひどく定めぬ世の中なので、どのようなことも思い通りに、生きている間の世を過ごしたく思うが、後にお残りになる晩年などが、言いようもない衰えなどまでが、心配されるものですから」

と、親しくお話しなさつて、上達部などもお棧敷に参集なさつたので、そちらにお出ましになつた。

「第二段 柏木や夕霧たちの雄姿」

近衛府の使者は、頭中將であつた。あの大殿邸を、出立する所から人々は参上なさつたのであつた。藤典侍も使者であつた。格別に評判がよくて、帝、春宮をお初めとして、六条院などからも、御祝儀の数々が置き所もな

いほど、ご鼻眞ぶりは実に素晴らしい。

宰相中将、出立の所にまでお手紙をお遣わしになった。人目を忍んで恋し合つお間柄なので、このようにねつきとしたお方と結婚がお決まりになったのを、心穏やかならず思っているものであつた。

「何と言つたのか、今日のこの挿頭は、目の前に見ていながら思い出せなくなるまでになつてしまつたことよ。あきれたことだ」

とあるのを、機会をお見逃しにならなかつたことだけは、どう思つたことやら、たいそう忙しく、車に乗る時であるが、

「頭に挿頭してもなおはつきりと思ひ出せない草の名は、桂を折られたあなたはご存知でしょう、博士でなくては」

と申し上げた。つまらない歌であるが、悔しい返歌だと思ひになる。やはり、この典侍を、忘れられず、こつそりお会いなさるのであろう。

「第三段 四月二十日過ぎ、明石姫君、東宮に入内」

こつして、御入内には北の方がお付き添いになるものだが、いつまでも長々とお付き添い申していらつしやることはできまい。このような機会にあの実の親をご後見役に付けようか」とお考えになる。

対の上も、結局は一緒になるはずなのに、このように離れて年月を過して来られたのを、あの方も、ひどいと思ひ嘆いていることだろう。姫君のお胸の中でも、今ではだんだんと恋しくお感じになつていらつしやる。お二方からおもしろくなく思われ申すのも、つまらないことだ」とお思ひになつて、

「この機会にお付き添わせ申しなさいませ。まだとても弱くいらつしやるのも不安なので、伺候する女房たちとしても、若々しい人ばかり多いです。御乳母たちなども、気をつけるといつても行き届かない所がありますから、わたし自身は、ずつとお付きできません時、安心なように」

と申し上げなされると、よくお気が付いたなあ」とお思ひになつて、これこれで、「と、あちらにもご相談になつたので、まことに嬉しく願つていたことが、すっかり叶つた心地がして、女房の着る装束、その他のことまで、高貴な方のご様子に劣らないほどに準備し出す。

尼君、やはりこの姫君のご将来を拝見したいお気持ちか深いのであつた。

「もつ一度拝見する時があるうか」と、生きることに執念を燃やして祈っているのであつたが、どうしたらお目にかかれるだろうかと、思つにつけても悲しい。

その夜は、対の上が付き添つて参内なさるが、その際、輦車にも一段下がつて歩いて行くなど、体裁の悪いことだが、自分は構わないが、ただ、このように大事に磨き申し上げなかつた姫君の玉の瑕となつて、自分がこのように長生きをしているのを、一方ではひどく心苦しう思つ。

御入内の儀式、世間の人を驚かすようなことはすまい」とご遠慮なさるが、自然と普通の入内とは違つたものとならざるをえない。この上もなく大事にお世話申し上げていらつしやうして、対の上は、本当にしみじみとかわいいと思ひ申し上げなさるにつけても、他人に譲りたくなく、本当にこのような子があつたらいいのに」とお思ひになる。大臣も宰相の君も、ただこのこと一点だけを、物足りないことよ」と、お思ひであつた。

「第四段 紫の上、明石御方と対面する」

三日間を過して、対の上はご退出あそばす。入れ替つて参内なさる夜に、ご対面がある。

「このようにご成人なさつた節目に、長い歳月のほどが存じられますが、よそよそしい心の隔ては、ないでしようね」

と、やさしくおつしやうして、お話などなさる。このことも仲好くなつた初めのようなのである。お話などなさる態度に、なるほどもつともだと、目を見張る思ひで御覧になる。

また、実に気品高く女盛りでいらつしやるご様子を、お互いに素晴らしいと認めて、大勢の御方々の中でも優れたご寵愛で、並ぶ方がいない地位を占めていらつしやうしたのを、まことにもつともなことだ」と理解される。と、こんなにまで出世し、肩をお並べ申すことができた前世の約束、いかげんなものでない」と思つ一方で、ご退出になる儀式が実に格別に盛大で、御輦車などを許されなかつて、女御のご様子と異ならないのを、思ひ比べると、やはり身分の相違というものを感ぜずにはいられないのである。

とてもかわいげに、お人形のようなご様子を、夢のような心地で拝見するにつけても、涙ばかりが止まらないのは、同じ涙とは思われないのであった。長年何かにつけ悲しみに沈んで、何もかも辛い運命だと悲観していた寿命も更に延ばしたく、気も晴れやかになつたにつけても、本当に住吉の神も靈驗あらたかだと思わずにいられない。

思う通りにお世話申し上げて、行き届かないこと、それは、まったくない方の利発さなので、世人一般の人氣、声望をはじめとして、並々ならぬご容姿ご器量なので、東宮も、お若い心で、たいそう格別にお思い申し上げていらつしやう。

競争なさつて御方々の女房などは、この母君がこうして伺候していらつしやるのを、欠点に言つたりなどするが、それに負けるはずがない。当世風で、並ぶ者がないことは、言うまでもなく、奥ゆかしく上品なご様子を、ちよつとしたことにつけても、理想的に引き立ててお上げになるので、殿上人なども、珍しい風流の才を競う所として、それぞれに伺候する女房たちも、心寄せている女房の、心構え態度までが、実に立派なのを揃えていらつしやう。

対の上も、しかるべき機会には参内なさる。お二方の仲は理想的に睦まじくなつて行くが、そうかといつて出過ぎたり馴れ馴れしくならず、軽く見られるような態度、言うまでもなく、まったくなく、不思議なほど理想的な方の態度、心構えである。

第三章 光る源氏の物語 准太上天皇となる

「第一段 源氏、秋に准太上天皇の待遇を得る」

大臣も、いつまでも生きていられないと思わずにはいられない存命中に「と、お思いであつたご入内を、立派な地位にお付け申し上げなすつて、本人が求めていることであるが、身の上が落ち着かず、体裁の悪かつた宰相の君も、心配もなく安心した結婚生活に落ち着きなすつたので、すっかりご安心なさつて、今は出家の本意を遂げよう」と、お思いになる。

対の上のご様子の、見捨て難いにつけても、中宮がいらつしやるので、並々ならぬお味方である。この姫君におかれても、表向きの親としては、真つ先にきつとお思い申し上げなさるだろうから、いくら何でも大丈夫」と、お任せになるのであつた。

夏の御方が、何かにつけて華やかになりそうもないのも、宰相がいらつしやるので」と、皆それぞれに心配はなくお考えになつて行く。

明年、四十歳におなりになる、御賀のことを、朝廷をお初め申して、大変な世を挙げてのご準備である。その年の秋、太上天皇に準じる御待遇をお受けになつて、御封が増加し、年官や年爵など、全部お加わりになる。そうでなくても、世の中でご希望通りにならないことはないのが、やはりめつたになつた昔の例を踏襲して、院司たちが任命され、格段に威儀厳めしくおなりになつたので、宮中に参内なさることが、難しいだらうことを、一方では残念にお思いであつた。

それでも、なおも物足りなく帝はお思いあそばして、世間に遠慮して、皇位をお譲り申し上げられないことが、朝夕のお嘆きの種であつた。

内大臣は太政大臣にご昇進になつて、宰相中将は、中納言におなりになつた。そのお礼言上にお出になる。輝きがますますお加わりになつた姿、容貌をはじめとして、足りないところのないのを、主人の大臣も、なまじ人に圧倒されるような宮仕えよりはましであつた」と、お考え直しになる。

女君の大輔の乳母が、六位の人との結婚」と、ぶつぶつ言つた夜のごことが、何かの機会ごとにお思い出しになつたので、菊のたいそう美しく、色の変化しているのをお与えになつて、

「浅緑色をした若葉の菊を濃い紫の花が咲こうとは夢にも思わなかつただらう。辛かつたあの時の一言が忘れられない」

と、たいそう美しくほほ笑んでお与えになつた。恥ずかしく、お気の毒なことをしたと思つ一方で、いとしくも、お思い申し上げる。

「二葉の時から名門の園に育つ菊ですから浅い色をしていると差別する者など誰もございませんでした。どのようにお気を悪くお思いになつたことでしょうか」

と、いかにも物馴れた様子に言い訳をする。

「第二段 夕霧夫妻、三条殿に移る」

「ご威勢が増して、このようなお住まいでは手狭なので、三条殿にお移りになった。少し荒れていたのをたいそう立派に修理して、大宮がいらっしやっ
たお部屋を修繕してお住まいになる。昔が思い出されて、懐しく心になつたお部屋である。」

前裁どもなど、小さい木であつたのが、たいそう大きな木蔭を作り、一叢薄ものび放題になつていたのを、手入れさせなざる。遣水の水草も取り
払つて、とても気持ちよさそうに流れている。

美しい夕暮れ時を、お二人で眺めなさつて、情けなかつた昔の、子供時代のお話などをなさると、恋しいことも多く、女房たちが何と思つていたかも
恥ずかしく、女君はお思い出しになる。古い女房たちで、退出せず、それぞれ
の曹司に伺候していた人たちなど、参集して、実に嬉しく互いに思い合つていた。

男君、

「おまえこそはこの家を守っている主人だ、お世話になつた人の行方は知っているか、邸の眞清水よ」

女君、

「亡き人の姿さえ映さず知らない顔で心地よげに流れている浅い清水ね」
などとおつしやつて、いるところに、太政大臣、宮中からご退出なさつた途中、
紅葉のみごとな色に驚かされてお越しになつた。

「第三段 内大臣、三条殿を訪問」

昔大宮がお住まいだつたご様子に、たいして変わるところなく、あちらこちら
も落ち着いてお住まいになつて、若々しく明るいのを御覧になるにつけても、
ひどくしみじみと感慨が込み上げてくる。中納言も、改まつた表情で、
顔が少し赤くなつて、いつも以上にしんみりとしていらっしやる。

理想的で初々しいご夫婦仲であるが、女は、他にこのような器量の人もいない
こともなかるうと、お見えになる。男は、この上なく美しくいらつ

しやる。古女房たちが御前で得意気になつて、昔のことなどを申し上げる。さき
ほどのお二人の歌が、散らかつてお見つけになつて、ふと涙ぐみなさる。

「この清水の気持ちを探ねてみたいが、老人は遠慮して」とおつしやる。

「その昔の老木はなるほど朽ちてしまつのも当然だろ。植えた小松にも苔が生
えたほどだから」

男君の宰相の御乳母、冷たかつたお仕打ちを忘れなかつたので、得意顔に、

「どちら様をも蔭と頼みにしております、一葉の時から互いに仲好く大き
おなりになつた二本の松でいらっしやいますから」

老女房たちも、このような話題ばかりを歌に詠むのを、中納言は、おも
しろいとお思いになる。女君は、わけもなく顔が赤くなつて、聞き苦しく
思つていらつしやる。

「第四段 十月二十日過ぎ、六条院行幸」

神無月の二十日過ぎ頃に、六条院に行幸がある。紅葉の盛りで、きつと
興趣あるにちがいない今回の行幸なので、朱雀院にも御手紙があつて、院
までがお越しあそばすので、実に珍しくめつたにない盛儀なので、世間の
人も心をときめかす。主人の六条院方でも、お心を尽くして、目映いばかり
のご準備をあそばす。

巳の時に行幸があつて、まず、馬場殿に左右の馬寮の御馬を牽き並べて、
左右近衛府の官人が立ち並んだ儀式、五月の節句に違わずよく似ていた。未
の刻を過ぎたころ、南の寝殿にお移りあそばす。途中の反橋、渡殿には錦
を敷き、よそから見えるにちがいない所には軟障を引き、厳めしくおしつ
らわせなさつた。

東の池に舟を幾隻か浮かべて、御厨子所の鵜飼の長が、院の鵜飼を召し
並べて、鵜を下ろさせなさつた。小さい鮒を幾匹もくわえた。特別に御覧
に入れるのではないが、お通りすがりになる一興ほどにである。

築山の紅葉、どの町のも負けない程であるが、西の御庭のは格別に素晴

らしいので、中の廊の壁を崩し、中門を開いて、霧がさえぎることなく御覧にお入れあそばす。

御座、二つ準備して、主人の御座は下にあるのを、宣旨があつてお改めさせなさるのも、素晴らしくお見えになつたが、帝は、やはり規定以上の礼をお現し申し上げられないのを、残念にお思いあそばすのであつた。

池の魚を、左少将が手に取り、蔵人所の鷹飼が、北野で狩をして参つた鳥の一番を、右少将が捧げて、寢殿の東から御前に出て、御階の左右に膝まづいて奏上する。太政大臣が、お言葉を賜り伝えて、料理して御膳に差し上げる。親王方、上達部たちの御馳走も、珍しい様子に、いつもの目先を変えて差し上げさせなかつた。

「第五段 六条院行幸の饗宴」

皆お酔いになつて、日が暮れかかるころに、楽所の人をお召しになる。特別の大きりの舞樂ではなく、優雅に奏して、殿上の童が、舞を御覧に入れる。朱雀院の紅葉の御賀、例によつて昔の事が自然と思ひ出されなさる。「賀皇恩」という樂を奏する時に、太政大臣の御末子の十歳ほどになる子が、実に上手に舞う。今上の帝、御召物を脱いで御下賜なさる。太政大臣、下りて拝舞なさる。

主人の院、菊を折らせなかつて、「青海波」を舞つた時のことをお思ひ出しになる。

「色濃くなつた籬の菊も折にふれて袖をうち掛けて昔の秋を思ひ出すことだろつ」

太政大臣、あの時は、同じ舞を「一緒申してお舞いなさつたのだが、自分も人には勝つた身ではあるが、やはりこの院のご身分はこの上ないものであつたと、思わずにはいらつしやれない。時雨が、時知り顔に降る。

「紫の雲と似ている菊の花は濁りのない世の中の星かと思ひます。一段とお栄えの時を」

と申し上げなさる。

「第六段 朱雀院と冷泉帝の和歌」

夕風が吹き散らした紅葉の色とりどりの、濃い薄いの、錦を敷いた渡殿の上、見違えるほどの庭の面に、容貌のかわいい童べの、高貴な家の子供などで、青と赤の白椽に、蘇芳と葡萄染めの下襲など、いつものように例のみずらを結つて、額に天冠をつけただけの飾りを見せて、短い曲目類を少しずつ舞つては、紅葉の葉蔭に帰つて行くところ、日が暮れるのも惜しいほどである。

楽所など仰々しくはしない。堂上での管弦の御遊が始まつて、書司の御琴類をお召しになる。一座の興が盛り上がったところに、お三方の御前にみな御琴が届いた。宇多の法師の変わらぬ音色も、朱雀院は、実に珍しくしみみとお聞きあそばす。

「幾たびの秋を経て、時雨と共に年老いた里人でもこのように美しい紅葉の時節を見たことがない」

恨めしくお思ひになつたのであろうよ。帝は、

「世の常の紅葉と思つて御覧になるのでしょうか。昔の先例に倣つた今日の宴の紅葉の錦ですのに」

と、おとりなし申し上げあそばす。御器量は一段と御立派におなりになつて、まるでそっくりにお見えあそばすのを、中納言が控えていらつしやるが、また別々のお顔と見えないのには、目を見張らされる。気品があつて素晴らしい感じは、思ひなしか優劣がつけられようか、目の覚めるような美しい点は、加わつて見えるように見える。

笛を承つてお吹きになる、たいそう素晴らしい。唱歌の殿上人、御階に控えて歌つている中で、弁少将の声が優れていた。やはり前世からの宿縁によつて優れた方々がお揃いなのだと思われるご両家のようである。

